

# 連珠っておもしろい

## 九段 河村典彦

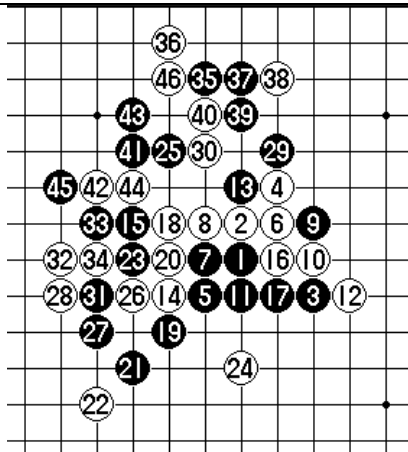
### ● 第130回 ●

#### ■ 挑戦手合い解説①

今回は昨年行われた第62期連珠名人戦挑戦手合い第2局を解説したい。昨年はA級リーグ、挑戦手合いで立ち合いを担当し、間近で何局か観戦することができた。久しぶりに名人戦の雰囲気味わうことができた。やはり頂上を争う大会であるため、緊張感が違う。そばで見ていると見えなくなるものもあるが、実際に戦っている棋士は案外見えていない。岡目八目とはよく言ったもので、気楽に見ることで見えてくる手もある。挑戦手合いでも勝ちが見えた局があり、それを中心に詳しく解説してみたい。連珠世界1月号に掲載されている第2局が題材となる。

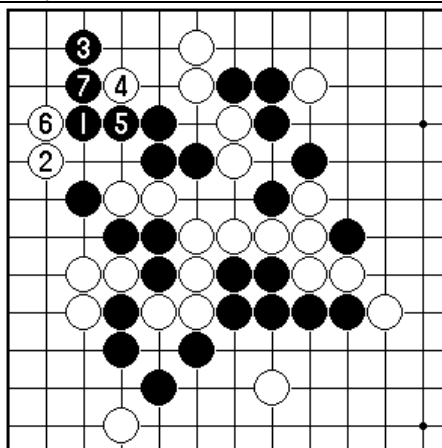
#### ● 挑戦手合い第2局

黒名人 神谷俊介  
白九段 岡部 寛



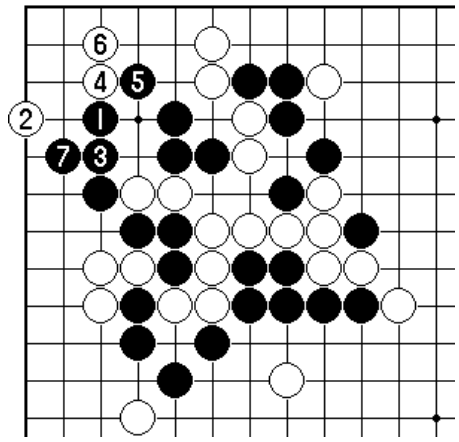
本局は新月白4に黒5と打ち、難解な展開となった。途中黒15から19までは知らないで打てない手で、両者の研究ぶりがうかがえる。岡部九段の白24が用意の一手で、黒有利に上辺に展開したものの、勝つのは難しそうだと思っていた。ただ、白38が少々欲張りだったようで、左上に勝ちがありそうな局面となった。このあたりは一手一手パソコンソフトで調べていたの

だが、黒41あたりから黒勝ちの表示になっていた。黒45に対し白46と止めるのは絶対なのだが、黒47から明らかかな勝ちがあるので調べていた。どの変化も黒勝ちか、と思いい局面を見ていた。ところが、神谷名人の打つ手が勝ちを読み切ったように見えぬ。このあたりは秒読みになっており、岡部九段も持ち時間を使わず打っているのが状況が追い付かない。神谷名人は秒読みになっていてもこの勝ちには読めるだろうと見ていたのだが、気づかなかったようだ。もし時間があと10分でも残っていたら見つけたと思うのだが、時間の使い方は個人の判断なので外からとやかくは言えない。あれ？と思いい再度詳しく調べたがやはり黒勝ちのようだ。黒47は次図の1とフクミを打つ手がいい手になる。この手は2回の四迫い

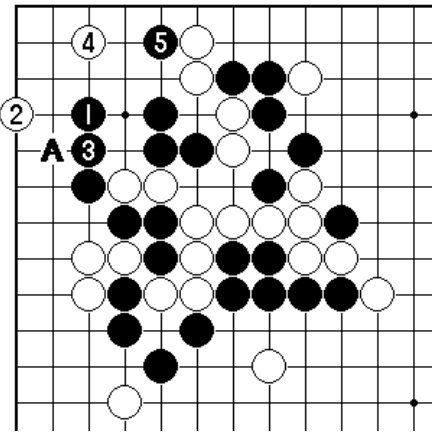


見える白2と止めるのが普通だが、黒3のトビ三がうまい手で、以下黒5、7で四三勝ちとなる。おそらく黒3のトビ三が見えなかつたのだろう。局後真っ先に指摘したが、両者まったく気が付かなかつたようだ。ここは変化があるのでそれを検討していこう。こういう狭い所は盤端を生かした夏止めがあり、結構ややこしいことが多い。しかも含み手なので止める手が複数個所あり、それを全部読

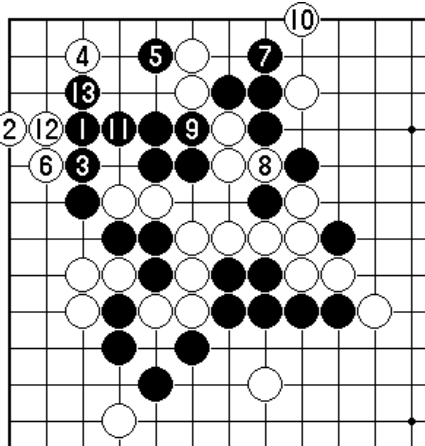
まなければならぬ。



黒1に白2と盤端から浮かして止める方が強い。先の変化で黒5が三にならないうようにするためだが、やはり剣先を止めているので単に防ぎとしても強い。続いて黒3と引き、素直に白4の止めなら黒5、7で四三となる。これはさすがに簡単なので、白4でも夏止めをする手が強いことがわかる。白4を6と止めれば黒5が三にならないので、この筋では勝てない。では、どう勝つか？と言

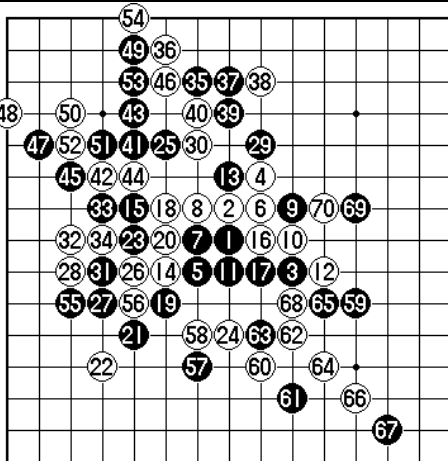


うことだが、黒5と押さえ、て黒Aの四三をミせる。



白6をどこに止めても以下四追いになる。結局は11、13の斜めの三を作ること

になる。実戦ではいつ黒5と押さえるかが難しく、読めなかったのだろう。このようにノリ手が絡むと勝ちが一気に難しくなるので、日頃から追い詰め感覚は持つておいた方がよい。実戦で現れた筋を確認するの力が良いだろうし、他人の局を並べるのも良い。終盤の力は経験でしか学べないの



重要である。ちなみに、本局を最後まで見てみよう。

黒47と四ノビをしてしまつてはもう勝てない。黒49に白50が急所の場所で、この手を打たれてはここで勝ちをあきらめなければならぬ。

ただ、神谷名人は下辺に先着し、黒59と打つて負けないように打ち進めた。おそらくこれでもまだ黒有利で、時間があれば上辺で再度攻めただろう。白も60、66で攻めを見せたが、ここは黒の方が厚くあまり深追いすると傷を負いそうな局面だったので、満局を提案したのは妥当だろう。神谷名人は得意の黒でいい展開を見せ、勝ち寸前まで行ったのだが、最後で勝ちを見つけれなかった。ただ、負けなかったのは大事なこと、これで2局終わって1勝1分で非常に有利な展開となった。今後は時間があるので、挑戦手合いはじっくりと鑑賞したいと思っている。